

琉球大学学術リポジトリ

琉球の古文書にみられる祭祀植物ミガインとシヂョク

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2023-05-08 キーワード (Ja): ススキ, マサキ, トウツルモドキ, 古語, 琉球国文書 キーワード (En): Miscanthus sinensis Anderss., Euonymus japonicus Thunb., Flagellaria indica L., Archaic words, Ryukyu Kingdom documents 作成者: 新里, 孝和, Chen, Bixia メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019769

琉球の古文書にみられる祭祀植物ミガインとシヂョク

新里孝和^{1*}、陳 碧霞²¹国頭村文化財保存調査委員会、²琉球大学農学部亜熱帯地域農学科

The ritual plants recorded in ancient documents of Ryukyu Kingdom, dialect names of Migain and Shidiyoku

Takakazu SHINZATO^{1*}, Bixia CHEN²¹Kunigami Village Cultural Properties Preservation Survey Committee,²Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus

キーワード: ススキ、マサキ、トウツルモドキ、古語、琉球国文書

Keywords: *Miscanthus sinensis* Anderss., *Euonymus japonicus* Thunb., *Flagellaria indica* L., Archaic words, Ryukyu Kingdom documents

*Corresponding author (E-mail: shinri.takakazu@gmail.com)

ミガインはススキか、シヂョクはマサキか

伊波¹⁾は、「あまみや考」で“天の^て日^ひ神^{かみ}の、よばひぐわ(妾腹の子)の、狂れ子の、大島に下り[れ]て、・・・(中略)”の文中の“大誓・世誓・あざか誓・しちよく誓しめて”の「あざか」と「しちよく」について、『聞得大君加那志様御新下日記』を引用して考察している。御新下日記によると、聞得大君が与那原に着いて着座すると「あざか・みがいん・しちよく三品並御稔、御歳直之掟之あむにて首里大あむしられ御取次差上候得者、御前江御飾被^レ仕候事」があり、三品の「あざか・みがいん・しちよく」は神聖な植物であるのは確かで、「みがいん」が御ゲーンで薄(ススキ)、「あざか」がチヌマチの和名三味線蔓(注: ナガバカニクサのことだろう)、「しちよく」がフチマの琉球アオキ・ボチョウジであろう、とする。宮城²⁾も、ススキとともに「シチョク」(注: 青木と記すが、リュウキュウアオキ・ボチョウジのことだろう)は神の依代になる植物であるとしている。その当時、「しちよく」は研究者間で広くボチョウジと解釈されていたと思われる。

『聞得大君加那志様御新下日記』³⁾から、「あざか・みがいん・しちよく」に関する記述を下記に抜粋すると、御規式之次第

一、右通、御着座被^レ遊候間、あざか、みかいん、しちよく三品、○御稔、御歳直之掟之あむ二而、首里大あむしられ御取次差上候得者、御前江御飾被^レ仕候事。

一、右、御規式相濟、本之様、白はせを御衣裳御着、(中略)、御五水左右、次ニ御水、御稔左右、掟之あむ四人ニ而上ケ、其次ニ、真中○、あざか、みかいん、しちよく、御菓子盆ニ載せ、御歳直之掟之あむ二而上ケ、御備仕事。

一、神之庭江、おちよわい被^レ為^レ遊候得者、親川の御祝物、あざか、みかいん、しちよく、御水、御稔、御座敷之前江、御飾仕候。(以下省略)。

聞得大君御殿御規式次第

一、御新下之時、(中略)、御仮屋江御着座、御仮屋者壺間角、御井川の御向ニ相調、与那原の二而、御井川江美花、御酒差上、御たかへ、みしきよち、あざか、みかいん、御水者、御天目ニおかけ、御仮屋ニ御飾仕。(以下省略)。

とあり、あざか、みかいん、しちよくの三品が聞得大君御新下の儀式に用いられた(文章中辞書にない文字○は記述しなかった)。

同書(『知念村史』³⁾)の「聞得大君と御新下 解題」(新垣源勇: 記)に、六御前の六庫理・寄満・三庫理・ちょうのはな・しきよだゆる雨がの美御水・雨だよるあしかの美御水は齋場御嶽内の祈願場所として記述され、湧上⁴⁾は「シキョダルアマガ美御水(国王の聖水。聖なる草をうるおす御水の意)、アマダユルアシカヌ美御水(大君の聖水。聖なる木をうるおす御水の意)」とするが、“しきよ”“あしか”、また“あざか、みかいん、しちよく”の解釈がない。ただ、『知念村文化財ガイドブック』⁵⁾には、「シキョダルアマガヌビー(シキョを伝わって、天から流れてくる聖水)・アマアユルアシカヌビー(天からアザカの木を伝わって流れてくる聖水)」とあり、シキョが草本、アザカが木本と祭祀植物であることを示している。アザカは、琉球の植物古語からススキであるが^{6,7)}、国家祭祀の久高島イザイホーと同じように聞得大君と御新下の齋場御嶽でもナガミボチョウジを意味していると思われる。

仲原⁸⁾は、「両碑文中の難句について」(1953年)の説明で、『御新下日記』はアザカ三筋、ミカイン三筋、シチョク三筋づつを、シチョクは中、アザカとミカインは側にして持ち、根より一寸程ツルマキにて巻、中は真芋にて七八寸巻、また末の方一寸ばかりツルマキで巻く、と記すとあり、アザカは青葉の赤い実の生る青木、シチョクは生姜または小さいアシに似た山ショウガ、ミカインはゲーンのススキである、と結んだ。そして「二 古い唱え物」みせせる(神託)とおもろ(1957年)の項で、あざかは琉球青木、アザカ・ガネのガネはススキ(ゲーン)、山生姜の古名はシキョすなわち藤蔓モドキであるとする。

仲原⁸⁾の『御新下日記』でいう真芋は沖縄方名マウー・マオ⁹⁾などからマオ(*Boehmeria nivea* Gaudich.)・ノカラムシ(f. *viridula* Hatusima)であろう。ツルマキは「アサカガネについて」(1953年)¹⁰⁾に「三味線かつら」とあるからナガバカニクサであろう。アザカとシチョクの解釈で、伊波と仲原に齟齬がみられるようである。

池宮¹¹⁾の『混効験集』の解説を列挙すると、「がいん」は薄之事、ごすきとも云、尾花さ共云。「がいん」は説明語句、薄のこととするが、ススキと桑を束ねて作るお払い用の採り物のことであろう。これをゲーンという。「みが(い)ん」と敬語で呼ばれるのもそのためであろう。「ごすき」は方言、ススキをグシチという。「尾花さ」の尾花は薄の穂または穂を付けたススキというから、「がいん」とも「ごすき」とも若干異なる。「さ」は誤入か。「みがん」は御萱なり、薄。「みがん」は「みがいん」とあるべきか。つまり「い」脱か。「がいん薄之事」とある、「みがいん」は「がいん」の敬語、ゲーンといい、一種の呪具。薄の株と桑の枝を合わせて結び、占めや神女の取り物とする。

由来記「芝ヲ指由来」に「桑條及薄株(俗称、我伊奴草)」とある。

ススキ (*Miscanthus sinensis* Anderss.) について、紀伊、伊勢、尾張などの方言に、スズキ、スズミ、スズシなどがあるが、もとは稲積の上に取り付けた呪物から生まれた名ではなかったという¹²⁾ (「稲の産屋」)。呪物とその名から、ススキの名前の起こりと祭祀植物との関わりが窺えそうにあるが、ススキのスはササ(笹)の変形、キはヒモロキ(神籬)のキ(甲類)と同じ「寸」(特別な長さの供え物)の意であり、神前の祭祀用語に語原環境がある¹³⁾ (図1)。ススキはカヤとも称し¹⁴⁾、茨城県新治その他の地方では6月21日を「青屋様」「青箸の日」といって、うどんを作りススキの生箸でそれを食べ、長野県では旧暦6月27日に「青箸の年とり」といって同じように箸でみんなで赤飯を食べ、その箸を神棚へも供え、また長野県小田切では盆に茶碗にご飯を盛り、これをひっくり返してそれにカヤの茎で作った箸を12膳挿したものを神棚へ供える。旧暦8月15日は、各地で餅を搗いてお月様に供え、ススキを添えて飾り十五夜のお月見をする。



図1 ススキの穂(名護市幸喜 11月9日)

沖縄ではススキ・茅は¹⁵⁾、茎葉を2,3本束ね、先を折り曲げて結ったものを魔除けにする。その大きなものをゲーン、小さなものをサンと呼ぶが、大小に関係なくサンと呼ぶ地域もある。ゲーンは旧暦8月の柴差の行事に桑の小枝と一緒に門・屋敷の四隅・井戸・畜舎などに差し、葬式や洗骨、マブイグミの時などに使い、サンは食べ物を移動する時などその上に置く。いずれも厄除で、ゲーン(サン)は畑に立てたり、薪や牛の餌の草の上に立てたり、立入りや占有の意味で用いられることもある。波照間島の建築儀礼一スバ儀礼で、物の占有を表示する機能の場合は茅をスパと呼ぶことがある¹⁶⁾。ススキは例えば(本永 清:私信)、茎葉の先を結んで①草束や薪の上において占有を表し②畑などに挿して儀式的標、神の依代となり③食べ物の上に載せて魔除けとなり、いずれの場合も霊的存在となる。

奄美の水祭り¹⁷⁾は、シュク(しとぎ)と称する米の粉を水でこねたものを椀に入れ、アダハと称するススキ3本を束ねたものを膳にのせ、河川の岸にそのアダハを立て、線香7本を立てて水神を拝み、シュクを川に投じてその水を家に持ち帰り、この米の精の水で祓いをして、魔除け・厄除けをする。柴挿しのシバはススキの意味をもって、ススキには邪神を祓う呪力があるとされた。西表島では(石垣長健;談)、ススキは通常はユシキと呼ぶがタナドゥリ(種取祭、旧暦1月)には、占有表示と同じようにシバと呼んでウガンジュ(御嶽)で茎葉を奇数の3~5本くらい花瓶に差して魔除けとし、ススキの根のように強く根付くようにと拝む。八重山新城島上池のアカムタ・クロムタの子神フサマロは左手に棒を右手に管をもって現れるがそれらの材料に記載がない¹⁸⁾。

貴重な資料を提供し教示してくれた西表島在の石垣長健(1951年生、私信)によると、「タナドゥリ(種子取祭)には苗代に蒔いた種がススキやチカラグサ(オヒシバ)のように、力強く成長するようにと、ススキを花活けに生けて祈願する。農家ではカシキ(赤

飯)を炊いて御嶽に納め、神司はこれでイバチ(円錐形のおにぎり)を作って捧げる。種子取祭の料理には一切、油もの、曲りもの(オオタニワタリなど)を使用しない。油はいろんなものを引き付け、曲りものは苗が真直ぐに伸びないためといわれ、そのため料理はタコ、ニンニク、カラシナなどの和え物を作るのが習わしである。以前は、カシキと和え物を各家庭から御嶽に納められていたが、今ではカシキのみ納めている。この日を境にしてタナドゥリからシクアまでの間、大きなもの音、奏でもの、建造ものなどを慎み、静かにしなさいといわれている。これは苗代に蒔いた苗が驚いて成長しない、カモなどの害鳥その他の被害を受けやすいからという。以前は、種を蒔いて10日間静かに物音を立てないように慎んでいたが、いつから今日のように長期間になったか定かでない。タナドゥリヨイは、各グループや家庭で行っていたが、現在は農家が少なくなためか館員が公民館に集まって祝をし、アヨウ、ジラーなどが唄われている。機械化以前は、苗代田で育苗、管理され、苗床を作り種蒔きをすると、水口を止め、ススキでシバ(芝結い)を作り、苗代田に立て、塩、米を供えて健全な苗が育つようにと祈願した。幼少の頃(稲葉村落で)、父が行ったのを覚えている。」(注:シバはサンと同じようにススキの葉先をアジマーにして結んだものである(石垣長健;談))。

また、千立村落のタナドゥリ儀式はかつて「他の村落と同様に、タナドゥリヨイは各グループや家庭で1週間から10日ほど行っていたといわれ、その10日前から生活に必要な米などを搗き、物音を立てないように謹慎し、当日はイバチを作り、ススキを活けて、仏壇、ヤーカザシ、火之神に祀った。イバチを食べるのは男だけで、女は禁止されていた。イバチの由来は、稲が豊作で、シラー(収穫した稲を積み上げたものを倉に見立てて)がいくつもできることを願っている。イバチを作る米は種籾として利用した残りの籾を精米したものである。戦後は、各家庭で配給されたメリケン粉で糞を作り、各家庭を回りその糞を食べながら種取祝を行っていた。最近では農家が少なくなり、公民館に集まって種取祝を行っている。千立御嶽で種子取の願いをし、トゥリムトウを回り、最後にスッカノピシで願いをして終わる。千立御嶽ではアオー、ジラーは唄わない。トゥリムトウではフタバでイニガタアオーを7番まで唄い、カレイでも同様に行い、スッカノピシではイニガタアオー7番までとカラノバサノアブタマーを唄う。」(石垣長健;私信)。

千立のタウビジラー(田植ジラー)(石垣長健;教示)。

1. 今日ガ日バヨ 黄金日バ シラビョウリヨ (サーユイサス)
 - * イラヨイヌコバナウレ (以下くり返す)
2. ヤ= ウヨン田バ 長マシバ 植イビチャルヨ(サーユイサス) *
3. ヤ= 我植ヌヨ クリヤサシヌ ニカヌ夜ヨ (サーユイサス)
4. ヤ= 神ヌ水ヨ 主ヌ水 アモサバヨ (サーユイサス)
5. ヤ= 下カイヤ白根ウリ 上カイヤ ヤバ葉ムイ (サーユイサス)
6. ヤ= ウルチムヌヨ 若夏ヌ ナリョウラバヨ (サーユイサス)
7. ヤ= ユシキ丈 イバイ丈 ムトウリョウリヨ (サーユイサス)
8. ヤ= 出ブリヤヌヨ ナリブリヤヌ ナリョウラバヨ (サーユイサス)
9. ヤ= 大徳ダニヨ 長徳ダニ タボラルヨ (サーユイサス)
10. ヤ= 石ヌ実ニヨ 金ヌ実 タボラルヨ (サーユイサス)
11. ヤ= ウヌ果報ドウヨ クヌ願イ 願ユルヨ (サーユイサス)
 - * イラヨイヌ願ユルヨ 願ユルヨ
 - カシユシサレー ニガイユシサレー

解釈: 1. 今日の日を選び 2. 先祖代々の田を植え付け 3. 我らが植え付けた、その夜から 4. 神の恵みの雨がもたらされ 5. 地中深く根を張り、上には若葉が萌え 6. 陽春の若夏の季節になれば 7. ススキやイバイ(注:チカラグサ・オヒシバ)のように、力強く生育し 8. 出穂の時期、結実の時期になれば 9. 大きな穂、長い穂を恵んで下さい 10. 石や金のような堅い実を付けさせて下さい 11. そのような豊年満作を叶えて下さい(注:は筆者)

ススキは、苗代田でシパ(芝結い)を作って立て、御嶽や家庭でその莖葉を何本か花瓶に生け、ススキのように稲苗が健やかに育ち豊かに実ることを願って拝礼する。古謡の「タウビジャー」(田植ジャー)は、ユシキ(ススキ)に果報の願いを込めて力強く唄う。ススキは村人や村落の平穏の願い、稲作の儀礼の祭具として霊力があり大事な役割・機能をもつといえよう。さらにススキは、宮古の「世の終わりの歌」¹⁹⁾の“ぐしゃんぎーん だすいきやぎーん”のように“杖の木 支える木”になり、西表の「タウビジャー」の“ユシキ 丈 イバイ丈”のように世や人の強靱な救いとなりまた豊かな実りを見守る、すなわち神との堅い絆の証しを授かり保持する祭具として歌われるのであろう。

「みがいん」は伊波¹⁾も仲原⁸⁾もススキ(御ゲーン・薄)とし、「あざか」は伊波¹⁾がチヌマキー三味線蔓(ナガバカニクサ、*Lygodium japonicum* Thunb. var. *microstachyum*(Desb.) Tard. & C. Chr.)、仲原⁸⁾がボチョウジ(リュウキュウアオキ、*Psychotria rubra*(Lour.) Poir.)とする。「しじよく」は伊波¹⁾がフチマ(琉球あおき・ボチョウジ)とし、仲原⁸⁾がトウツルモドキ(山ショウガ、*Flagellaria indica* L.)とする。すなわち、両者は「みがいん」はススキで共通し、池宮¹¹⁾の混効験集解説も同様ススキとしている。一方、金城²⁰⁾は仲原論に同意で、神女たちが呼んでいるクージがシヂョク(山ショウガ)である、すなわち「しじよく」をトウツルモドキに解していると察せられる。

琉球の神聖な植物三品で、「あざか」は本論のこれまでの解析ではススキであり、「みがいん」も三者共通のススキとすると、あと一品の「しじよく」が何か、仲原のいうトウツルモドキであろうか、「しじよく」が残る課題となる。トウツルモドキは、久高島のイザイホー祭祀にナンチュがハブイにし²¹⁾、本部町伊野波のシヌグで男女のムクジャがカブイに結び²²⁾、既述のように西表島干立の雨乞い御願に青年たちが体に巻きつすが、他地域のシヌグ・ウンジャミまたその他の祭祀には用いられない。つまり、トウツルモドキは祭祀植物として一般的なものではなく、それに「しじよく」は別の植物で『御新下日記』とその時代だけのものなのだろうか。

多和田²³⁾『ダシチャクギとその用途』(1963)の説をみると、『御新下日記』乾隆34年(※1769年・尚敬王)と同45年(※1780年・尚敬王)には「しじよく」はトウツルモドキになっているが、御新下の最初からそうであったかは問題であるといい、またダシチャクギはシマサオノキあるいはリュウキュウアオキ(ボチョウジ)とトウツルモドキの2種を分離して指すものではないとする。さらに前報²¹⁾で述べたように、多和田²³⁾『ダシチャクギとその用途』(1963年)はススキとその方言名は、シキユの語とス、シ、セ、ジ、ク、ユ、ドの修飾語根がくつついた語とみて、シキユは量の意でシチュサンのシチュで、シチュの多いキのシチュシチュキがススキであろう、と思考している。そして、シチュマは未熟な米の祭で、シチュは実入りの実ともなるとして、シチュシチュキがススキだからそれにあやかろうと稲作行事にはススキを用いる、としている。またシキユとシチュは同一語とみて、シキユのうち小さいのをノシキョ(ナジチュ、注:ハイキビ)、大きいのをグシキョ(グシチ、注:ススキ)といい、稲作行事に用いるススキは、ススキから稲に感応してよく繁茂し最大の収穫を得るように、シキユの少ない時に石の実金の実を注入してそうなるように拝礼するのがシキユマ祭であるという²³⁾。「沖縄先史原史時代の主食材料について」『南島考古』(1978年)。

本論の見解と、多和田説の「しじよく」—シキユ—シチュ—シチュシチュキ=ススキを総合すると、琉球の神聖な植物三品「あざか・みがいん・しじよく」はすべてススキということになる。袋中僧『琉球神道記』²⁴⁾のシキユ(注:シキユはススキの古語とする)も「しじよく」を差しているとなると、シヂョク—シキユでススキとなり、神聖な植物三品はススキとなるが、山生姜—シキユ—トウツルモドキの見方もあり、御新下日記の供え物は一品あるいは二品を三品と記したことになる。

ここで、袋中僧『琉球神道記』「キンマモンの事」のタシカを本論でススキとすると、原田²⁴⁾がススキの古語としたシキユについて再考してみる必要がある。袋中僧の著した3植物はいずれもその生

育地の優占種、すなわちヤマとなすものであり、アダンは沿岸地、タシカのシキユは山野地に繁茂するものからして、あと1種のシキユはススキの古語ではなく、神の国造りの文章の内容から、地の自然の他にヤマをなし国の体となり人の食生活を支えるもの、耕地田畑の主要作物となる穀類で、稲・麦・粟などをさしているのではないかと推察される。

仲原¹⁰⁾(「アザカガネについて」)はシキョ・シキユ・シヂョク・シヂョコ・セジョク・ズクは同じとする。一方、伊波¹⁾は、種子取に謡われたアマーオエーダー(天つ御田・神田)の解釈で、「しきよま戴らさや」(48)は新米で炊いた御初を祖神に奉らせ、なほらひ(琉球語ウノーイ)を戴かせようね、という意であるとする。さらに、御初はシキョマで、もと麦稲の初穂の義であったのが、いつしか御初(おはつ)に転じたに違いないということである。同じような祭祀で、奄美群島では稲そのものを神とし、稔った稲を神として家に迎えるシキユマの儀礼がある²⁵⁾。これらの祭祀儀礼から、シキョマ=シキユマで、『琉球神道記』のシキユは麦穂・稲穂の意になり、『御新下日記』の「しじよく」は別の植物種ではないかと思われる。

一方、湧上²⁶⁾は『琉球国由来記』の「玉城間切年中祭祀」の項目に記載されている神女が殿や神アシャギでうたう「巫唄」の唱えごとはウミイというよりミセセル(託宣)に近いという。奥武村の「稲二祭」(稲穂祭の五月ウマチーと稲大祭の六月ウマチー)のとき神女が祭場や祭屋で唱える巫唄は、類型的画一的な紋切型で、聞得大君御殿や公儀あたりから強制された官制の祭詞であろうとして、「王権祭祀の中で醸成されたオボツ・カグラの天上他界観を、官祭の麦稲四祭などを通して、地方祭祀にまで及ぼそうとした事例の一つではあるまいか」と述べている。そして、15世紀尚真王時代の祭祀一致による神女制度の確立で、村落祭祀は稲(麦)二祭のウマチーに重点が移り、古来の漁撈祭祀はシヌグやウンジャミのかたちで辺地や離島に残ってきたとする。

湧上論文以前に、伊波²⁷⁾(「琉球の口承文芸」(『古琉球』))は、オモロの同義語にセルムというのがあり、これには宣りの義があるが、国王もしくは女神人がオモロを賜わる場合にはミセセルといたたとして、聞得大君は国王を守護する「をなり神」(姉妹の生御魂)であるとする。さらに、「をなり神」の同義語が「くせせりきよ」と出ていて、くせはあや(綾)の同義語で、奇しきの義、せりは宣りの義、したがって「くせせりきよ」は神の御心を宣る奇しき人の意があり、「これはかつて聞得大君が神託を聴いて、国王に伝えた時代のあったことを語るものである。これを見ても、セルムに神意を宣るの義があり、従ってオモロが形式化された神の言葉の義に用いられたことは明白である。」という。

「琉球開闢の事」²⁸⁾(『知念村史』)から『中山世鑑』に「五穀ノ祭神ト申スハ、当初、穴居野処、与物相友、無有妒傷之心。未知稼穡、食草木之実、未有火化、飲禽獸之血、而茹其毛ナトシテ、人繁栄難成ケレハ、阿摩美久、天ヘノホリ、五穀ノ種子ヲ乞下リ、麦粟菽黍ノ、数種ヲハ、初テ久高島ニシテ蒔給。稲ヲハ、知念大川ノ後、又玉城ヲケメシニシテ蒔給。」とあり、春夏4度の祭神はその始めで、2月久高、4月知念・玉城の大祭の行幸もその始めにあると記す。作物および祭祀植物は海からもたらされたもので、伊波²⁹⁾(『南島の稲作について』)は「ニライ・カナイから、つゝ物・寄り物」として海の信仰・来訪神との関わりを示している。以上、来訪神と関わる穀類に関する儀礼、ウマチーなどに用いられる植物から「シヂョク」を今一度再考してみよう。

津波³⁰⁾によると、沖縄の穀類に関する儀礼と来訪神儀礼は穀類と並存あるいは結びついている地域や祭祀があり、並存型—結合型とも女神人は来訪神の象徴である冠り物(カーブイ・ハーブイ)を用いる。ハーブイは、久米島が六月ウマチーにミチャブイ、粟国島がヤガン折目にカナブ(イタジイ)、北谷町が麦稲四祭にヤマカランダ、糸満市がウマチーにチヌマキを用い、手に持つものには、粟国島三月麦ノ大祭のアザカ、糸満市のグシキがある。供え物と

して、久米島の稲穂祭の穂三筋、稲大祭の新米ノ御花、がある。奄美群島³¹⁾のハブイは、与論島のウンジャン祭のウンガラ(甘藷蔓)、手に持つものには与論島の杖(植物は不明)、加計呂麻島須子茂の「神迎え・送り」のアダハ(ススキ)・与路島の「ウムケ」もススキ、供え物として名瀬の「オウンメ(折目)」で、六月大熊の「アラホバナ(新穂花)」の稲穂1本(神棚の柱にかける)、須子茂の根付の稲穂3本があり、与路島のミシヤク(神酒)やシューキがある。

これらのハブイにする植物は、久米島のミチャブイはホウビカンジュ³²⁾、北谷町のヤマカンダーはノアサガオ⁹⁾、糸満市のチヌマキはナガバカニクサ、グシキはススキであろう。与路島のシューキは大野³³⁾によるとモクビヤッコウ、与論島のウンジャン祭でウンガラは甘藷蔓とあるが、ウンジャンカジラ(シダカズラ、ウンジャンハジラ)はテリハカニクサとある^{33,34)}。

しちよく・しじよく・シチヨクの名称また祭祀植物は、現在の各地域の年中行事の祭具や供え物から見つけることはできない。仲原¹⁰⁾はシチヨク=山ショウガ=シキョ=トウツルモドキとするが、トウツルモドキをイザイホー祭祀のハブイにする久高島の祭祀また年中行事にも、供え物にトウツルモドキは見られない。

伊波¹¹⁾は「しじよく」をフチマの琉球アオキ・ボチヨウジとしたが、このフチマの方言名に視点を当てると、天野³⁵⁾は斎場御嶽周辺の植物調査で、方言名フチマはニシキギ科(Celastraceae)のマサキ(*Euonymus japonicus* Thunb.)と記し、関連する祭祀植物の方言名でナガミボチヨウジには記録なし、トウツルモドキはトウで、ヤブランとノシランがヤマショウガと記録している。マサキは、琉球各島の海岸域に多産し低地から山地に広く生育する、その他北海道南部から九州のほぼ全域、朝鮮南部、台湾(紅頭嶼:現蘭嶼)に自然分布する³⁶⁾。琉球列島におけるマサキの方言名は多く、天野⁹⁾と大野³³⁾から、タバクニンギ(奄美;笠利・名瀬)、ハナコモギ・ブキブキギ(奄美;大和)、ヤチク・ヤチック・チャク(与論)、ビビンギ(楚洲)、カニクンブ(辺土名)、フチマ(辺土名・饒波・田港・首里・久手堅・久米)、ファマクンブンギー(饒波)、ファマクニブンギー(諸志)、フチャトーギー(具志堅)、タマクンブンギ(真喜屋)、トートーメーギ(宇茂佐)、ブチマ(幸喜)、フチマンギー(幸喜・漢那)、タマクンギ(伊平屋)、ソーグウチバーナ(久米)、フチマギ(座間味)、フクマンギ(渡嘉敷)、サカキ(首里)、ワカギ(沖縄・久高)、イブサナビギ(宮古)、ピスマキ(多良間)、フサマーベ(川平)、フスマンギ(石垣)、フスマーギ(石垣、西表)、パンシカ・パンシキ・パンチケマキ(西表)、フティマ(鳩間)、ダマツルビ・チルビ(与那国)がある。日本各地のマサキの方言名は¹³⁾、アオキ(静岡)、タマツバキ(宮城・山形・茨城・栃木・千葉・新潟・静岡・京都)、ハマツバキ(山口・愛媛)、ユミノキ(熊野)などと称する。

南城市におけるマサキの方言名は、久高島がワカギで久手堅がフチマ、トウツルモドキは久高島がハブイで知念がヤマショウガ、ヤブランは久高島がクルビタラ・ピタで、「佐敷町産種子植物」³⁷⁾では、マサキがフティマンギー・フチャトーギー・トートーメーギー、ノシランがヤマクープ・ヤマビラ、トウツルモドキが記載なしである。方言名ヤマショウガは、ヤブラン・ノシラン(斎場御嶽周辺)とトウツルモドキ(知念)の2種に称されている。ヤマショウガの方言名は分散し、トウツルモドキの生育初期の形はいく分ショウガに、ノシランはクープ(昆布)・ピラ(ニラ)に似るが、ヤブランをショウガとするのは不明である。ショウガの特徴の1つは肥大する地下茎の芳香にある、トウツルモドキはツル性でその姿が龍蛇信仰からハブイにするのは理があるが、その茎葉は少し香りがあるものの形が大きく葉が長く、ヤマショウガとして供え物の「シジヨク」にするには無理があると思われる。

マサキは筆者の一人新里が幼いころ(本部町渡久地)から馴染みのある常緑性の灌木で、葉は厚みがあり濃緑で艶があり、当年枝は通常直に伸びて、枝葉のすがたに生気を感じさせる祭祀植物で、旧盆旧正、年間行事や何かの神仏事があると、仏壇や墓前の花瓶によくさして拝礼した(図2)。マサキは沖縄各地とも神仏の行事に供され、通常各村落の垣根や墓地に植えられ、畑地周辺

の防風林にも配植されている。神仏事の行事に花瓶に供える花木からトートーメーギ・フチャトーギー・ソーグウチバーナなどと称される所以だろう⁹⁾。高知県沖の島ではコーシギ、コーシバと称して、庚申の日の祭りにその枝葉を供え、仏壇の供花ともする。長野県では、サカキのない所でその代用とし、仏前に供する所もあるという¹⁴⁾。

マサキの方言名カニクンブ・ファマクンブンギーは砂地(海辺)に生える九年母木、ビビキ・ビビンギ・ブキブキギは若葉の草笛の音、フチャトーギーは仏壇の供花の意であるという⁹⁾。フチャトーはトートーメー(仏壇)にお茶を供えるウチャトオ(御茶供?)と同語で、マサキの方言名フチマは、ウチャトオの際に花瓶に立てて供える木、トートーメーギー・ウチャトオギー・フチャトーギー・フチマンギー・フサマーベ・フスマンギ・フスマーギ・フティマなどの呼称に困むものと考えられる。『御新下日記』の“しちよく”は、神聖な場所のウチャトオに供える木からフチマギー、すなわちマサキなのである。

マサキは、冬季にかけて果実をつけ熟する。図3にみられるように、果実は球形で、熟すると3~4裂して中からきれいな黄赤色の種子が身を乗り出すように露出する³⁸⁾。この様子は、国頭村安田や奥のシヌグ祭祀のゴンズイの果実と類似し、ゴンズイは安田で方言ミイハンチャギー、マサキは西表島で方言パンシキヤン・パンシキ(石垣長健;談)と呼んで、同じような意味を含んでいる。果実が真赤にはじけて中の種子を露出するのは女陰とみなして魔除けに用いるが、トベラ、ゴンズイ、フチマといわれるマサキも同様である²³⁾(多和田「沖縄の染料植物と繊維植物」『琉球の文化』)。



図2 マサキの枝葉(北中城村仲順 2021年11月)



図3 マサキ果実
(裂果して赤い種子が見える、西原町翁長 2022年1月)

既報³⁹⁾で、マサキの方言名には伊平屋のタバクンギ(我喜屋)・タマクンブンギ(田名)もあり、タマはおそらく果実の形から玉でクスフはミカンの葉の意をいう(西銘仁正;談)。他に浜比嘉島のフスマ;浜区・フシマ;比嘉区(玉那覇成勇氏談)がある。ところが、方言名フチマは、西表島ではクチナシのことで、フチマの意は実が口を開いて噛むような感じからきたのではないかという(石垣長健;

談). クチナシの方言名は、奄美大島にもほぼ似たようなフチナ・フツナの呼称がある^{9,33)}。伊平屋島、浜比嘉島、西表島とも 神仏の供花にマサキはよく使い、クチナシは使わないという。

マサキは、祭祀植物の条件²²⁾からすると、①身の周りに生育して容易く入手することが出来る、②常緑性、を具えている、条件③の葉は全縁ではなく鋸歯縁である。さらに、マサキはボチョウジ属と同様に沖縄の祭祀植物の特性とする合掌型(十字対生葉序)をもち、ときとして3個の葉が輪生・枝端に集まる(束生型)こともある。一方、サカキは日本の神道行事の重要な役割を持ち、「大神の御杖代」の依り代となる。昔は、そのサカキと同じように、マサキはヒサカキ・オガタノキ・シキミ・カナメモチ・モクセイなどととも常緑広葉樹の総称のようにもちいられたという⁴⁰⁾。首里の方名サカキもそんなところに由来しているのだろうか。

改めて『御新下日記』の「あざか・みがいん・しぢよく」三品の神聖な植物を推察してみると、霊場に着座する聞得大君の前には、国家祭祀から、①あざか＝ナガミボチョウジ、②みがいん＝ススキ、③しぢよく＝マサキと、それに御稔のシキユの稲か麦の穂を供えられたと思われる。

これまでの論で沖縄の祭祀植物について①「あざか」は本来のススキとしたが、国家祭祀を行う久高島ではナガミボチョウジはアザハ・アラカと称して、イザイホーのハブイや麦の初穂儀礼のソージ・アサガミ・ユウガミなどに用いられているので⁴¹⁾、王府時代の祭祀の「あざか」は沖縄中南部や周辺の島の森林に普通に生育する合掌型・十字対生葉序をもつナガミボチョウジが供えられたものと考えられる。②ススキは古くはアザカと称せられと思われるが、ここでは「みがいん」は御萱ーゲーンーガインーミガインと変化する祭具の代表的な植物のススキであろう。ススキは琉球・沖縄における別格の祭祀植物であり、国家祭祀の聞得大君やノロだけでなく、地方の重要な祭祀、年間行事、魔除け・厄除けなど、日常のほぼすべての神仏儀礼や土着信仰儀礼の“立てる”“刺す”“留める”“束ねる”仕草の祭具に供されたと思われる。③マサキは琉球の祭祀植物の関連文献にそれほどみられないが、伊波¹⁾の記載したフチマから、「しぢよく」は古来サカキとともに常緑広葉樹の総称とされたマサキであろう。マサキは、今日でも広く村落の土着信仰や神仏行事の祭具に供され、仏壇や墓前の花生けに差してよく用いられる。

中国語には、穀類は稌:ci・ツで、樹木のマサキは4語あり⁴²⁾:冬青衛矛・dōng qīng wēi máo・ドンチンウェイマオ、大叶黄楊・dà yè huáng yáng・ダイエホワンヤン、八木・bā mù・バム、正木・zhèng mù・ゼンム、とあるが、琉球方言名のシキョ・シキユ、またシヂョクやフチマにつながる言語は見出せなかった。

首里王府は、国家祭祀である久高島イザイホーで神女のハブイに龍蛇信仰を揺るぎないものとするトウツルモドキをかざし、祭祀植物の要であるアザハと称して十字対生葉序をもつナガミボチョウジをハブイにさす。『御新下日記』に記す「しぢよく」の方言名フチマと呼ぶマサキは、祭祀植物として民人の年間行事で広く用いられていたものが国家の祭祀に採用されたのか、その逆か本論にその考察はないが、マサキはナガミボチョウジと同様に琉球の祭祀植物の特徴とする対生葉序のかたちをもち、かつての常緑広葉樹の代表種でもある。さらに、祭祀植物の条件の一である合掌型(対生葉序)と蓮型(束生)を併せ持つマサキ(フチマ)は、国家祭祀の聞得大君御新下で神聖な植物の三品としてナガミボチョウジ(アザカ)とススキ(ミカイン)と一緒に供えられたであろう。

昨年に続き、年明け以降(2021年)コロナウイルス緊急事態宣言によって外出、会食、集会などが自粛され、本研究の現地調査が不能となり、各市町村図書館も閉館を余儀なくされ、調査は電話やメールでの情報交換となった。この度の「琉球の古文書にみられる祭祀植物ーアザカ、ダンチャ、ダンチャクギとアザカガネ、ミガインとシヂョク」に関する一連の調査の執拗な度重なる質疑にも

快く応じていただいた南城市の沖縄造園建設業協会の元会長; 屋比久 勉氏、久高島の南城市アマミキヨ浪漫の会; 西銘 政秀氏、伊平屋村の民俗芸能保存会事務局長; 西銘 仁正氏、久米島出身の元沖縄県土木建設部部長; 江洲 順吉氏、元美ら海財団常勤参与; 新里 隆一氏、うるま市浜比嘉島の歴史民俗研究者; 玉那覇 成勇氏、奄美方言研究者; 重野 裕美氏、琉球大学名誉教授・元付属熱帯生物圏研究センター長; 新本光孝氏、また植物調査にご協力いただいた琉球大学農学部付属与那フィールドの専門技術員; 外間 聡氏、さらに祭祀の儀式や植物、方言、歌謡についてご教示いただいた八重山地域の琉球大学付属熱帯生物圏研究センターの元専門技術員; 石垣 長健氏、宮古地域の沖縄文化協会会員; 本永 清氏、これらの方々々に衷心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 伊波普猷.1938.「あまみや考」(「日本文化の南漸一をなり神の島統篇一」). (「伊波普猷全集 第五卷」1974), 株式会社平凡社, 東京, pp.542-544.
- 2) 宮城栄昌・国頭村役場編集.1967.「国頭村史(別冊)」, 国頭村役場, 沖縄, p.54.
- 3) 知念村史編集委員会.1983.「(二)『聞得大君加那志様御新下日記』」.『知念村史 第一巻 資料編 I』知念村役場, 沖縄, pp.270-274, 313, 314, 332.
- 4) 湧上元雄. 1982.「南島の聖域とイザイホー」.『日本の聖域 第7巻 沖縄の聖なる島々』, 株式会社佼成出版社, 東京, p.122.
- 5) 新垣源勇・真栄平房敬(監修).2000.「お新下り」(『知念村文化財ガイドブック』), 知念村教育委員会, 沖縄, p.14.
- 6) 新里孝和・陳碧霞・西銘政秀.2020.「沖縄・久高島の祭祀植物の連関と歴史的意義」.琉球大学農学部学術報告, 67:14-20.
- 7) 新里孝和・陳 碧霞.2021.「琉球の古文書にみられる祭祀植物アザカ」.琉球大学農学部学術報告, 68. (投稿中)
- 8) 仲原善忠.1977.「仲原善忠全集 第二巻 文学篇」, 沖縄タイムス社, 沖縄, pp.28-54, 66-72, 164-178, 432-438, 498-504.
- 9) 天野鉄夫.1979.「琉球列島植物方言集」, 新星図書出版, 沖縄, pp.85-86, 111, 148-149, 178-179, 198.
- 10) 仲原善忠.1978.「仲原善忠全集 第四巻 補遺篇」, 沖縄タイムス社, 沖縄, pp.394-406, 406-414.
- 11) 池宮正治.1995.「琉球古語辞典混効験集の研究 南島文化叢書17」, 第一書房, 東京, pp.119, 193.
- 12) 柳田国男.1982.「稲の産屋」.『海上の道』(第1刷 1978), 株式会社岩波書店, 東京, p.257.
- 13) 吉田金彦(編著). 2001.「語原辞典 植物編」, 株式会社東京堂出版, 東京, p.132.
- 14) 長澤武.2012.「野外植物民俗事苑」, ぼおずき書籍株式会社, 長野, pp.354, 217-218.
- 15) 山里純一.2020.「第六節 魔除け・呪符」(沖縄県教育庁文化財課史料編集班「沖縄県史 各論編 第九巻 民俗」), 沖縄県教育委員会, 沖縄, p.46-47.
- 16) 赤嶺政信.2016.「第7章 八重山の建築儀礼に見える信仰用具」(編集: 沖縄県教育庁文化財課『沖縄県文化財調査報告書 151 集 沖縄の信仰用具に関する総合調査事業』), 沖縄県教育委員会, 沖縄, pp.278-280.
- 17) 金久正.1978.「奄美に生きる日本古代文化・増補版」, 至言社, 東京, pp.73-227.
- 18) 平敷令治.1990.「沖縄の祭祀と信仰」, 第一書房, 東京, p.392.
- 19) 新里孝和・陳碧霞.2021.「琉球の古文書にみられる祭祀植物ダンチャ」.琉球大学農学部学術報告, 68. (投稿中)
- 20) 金城朝永.1974.「金城朝永全集 下巻 民俗・歴史篇」, 沖縄タイムス社, 沖縄, pp.252-278.

- 21) 新里孝和・陳碧霞・西銘政秀.2020.「沖繩・久高島イザイホーの祭祀植物」.琉球大学農学部学術報告, 67:7-13.
- 22) 新里孝和.2013.「沖繩シヌグ祭祀の植物観」,名護博物館紀要あじまあ・17,沖繩,pp.41-64.
- 23) 多和田真淳.1980.「古希記念 多和田真淳選集(考古・民俗・歴史・工芸)篇,二民俗篇」(pp.165-186)「古琉球の祭具=アザカガネとダシチャクギ」『沖繩タイムス』1963年11月3日~14日,pp.187-198「はぶいの植物学」『えとのす』第1号(1974),p.132「沖繩先史原史時代の主食材料について」『南島考古』第4号(1978)「沖繩の染料植物と繊維植物」『琉球の文化』第2号(1972),編集発行:古希記念多和田真淳選集刊行会(沖繩県立博物館気付),沖繩,pp.260-261.
- 24) 弁蓮社袋中・原田禹雄註.2001.「琉球神道記」榕樹書林,沖繩,pp.236-403.
- 25) 小野重朗.1977.「神々の原郷—南島の基層文化—」.財団法人法政大学出版会,東京,pp.217-241,143-144,64-71.
- 26) 湧上元雄.1987.「沖繩の古代祭祀と他界観」.(福田 晃・湧上元雄:編「琉球文化と祭祀」),ひるぎ社,沖繩,pp.105-111.
- 27) 伊波普猷.2017.「古琉球」(外間守善;校訂)(第9刷),株式会社岩波書店,東京,pp.144-156.
- 28) 知念村史編集委員会(編集).1983.「琉球開闢の事」(知念村史 第一巻資料編1 知念の文献資料),知念村役場,沖繩,p.112.
- 29) 伊波普猷.1974.「南島の稲作行事について」(『伊波普猷選集 上巻』)(初版1961),沖繩タイムス社,沖繩,pp.425-471.
- 30) 津波高志. 2020.「第二節 沖繩諸島の村落祭祀」(沖繩県教育庁文化財課史料編集班;編集「沖繩県史 各論編 第九巻 民俗」),沖繩県教育委員会,沖繩,pp.498-519.
- 31) 町健次郎.2020.「第一節 奄美諸島の村落祭祀」(沖繩県教育庁文化財課史料編集班;編集「沖繩県史 各論編 第九巻 民俗」),沖繩県教育委員会,沖繩,pp.486-497.
- 32) 上江洲均.1982.「沖繩の暮らしと民具」(考古民俗叢書(19))慶友社,東京,pp.149-191.
- 33) 大野隼人.1995.「奄美群島植物方言集」,財団法人奄美文化財団,鹿児島,pp.8-10,34,75,88.
- 34) 新里孝和・芝正巳.2016b.「沖繩・うるま市,浜比嘉島シヌグ植物のナガバカニクサ論」.琉球大学農学部学術報告, 63:77-87.
- 35) 天野鉄夫. 1982.「斎場御嶽及びその周辺の植物」(沖繩自然研究会調査報告 沖繩県自然環境保全地域 指定候補地学術調査報告書 知念グスク・斎場御嶽とその周辺地域),沖繩自然研究会,沖繩,pp.77-90.
- 36) 初島住彦.1975.「琉球植物誌(追加・訂正版)」,沖繩生物教育研究会,沖繩,p.579.
- 37) 平田義浩.1989.「佐敷町産種子植物」(II 佐敷町の陸上植物『佐敷町史 三 自然』),佐敷町史編集委員会:佐敷町役場,沖繩,pp.93-196.
- 38) 牧野富太郎.1968.「新日本植物圖鑑」(第17刷),株式会社北隆館,東京,pp.1060,392,362.
- 39) 新里孝和・芝正巳.2017.「沖繩・伊平屋村田名のウンジャミ祭祀の祭祀植物としてのガジュマル」,琉球大学農学部学術報告,64:55-63.
- 40) 足田輝一.1985.「樹の文化誌」,朝日新聞社,東京,pp.413-414.
- 41) 比嘉康雄.1993.「神々の原郷久高島 下巻」,(株)第一書房,東京,pp.16-17,39-41.
- 42) 中国科学院植物研究所. 1972.「中国高等植物図鑑,第二冊」,科学出版社,中国, p.665.